

二十日未明千歳は禮文島の北西二十哩に達し、宗谷海峡の中央に進みしも敵を見ず、且つ天候不良にして展望充分ならざるを以て、八時二十四分宗谷岬に近寄り位置を確めんとする際、禮文島の西方六十哩より索敵しながら來航せる對馬に會し、千歳は直ちに宗谷岬とシレット岬との一線上に進みて監視の任に當り、對馬をして十時三十分よりコルサコフ方面を索敵せしめしに、同艦は午後四時三十分コルサコフ港外に於て敵艦ノーウイクを發見砲撃し、多大の損害を與へたるに、敵は五時四十分錨地に引返して盛に白煙を上げ、其艦影を掩ふに至れるを見たりと云ふ。此時對馬は敵彈の爲め六番八番炭庫に浸水あり、艦の傾斜漸く大ならんとせるを以て一時彈着外に出で應急修理に着手せり。千歳は對馬の電信に接し直に戰場に向ひしも、日没に至りしを以て引返し、同夜對馬をして海峡を監視せしめ千歳は港外を警戒せり。二十一日未明千歳はコルサコフ錨地に進みノーウイクの既に市街陸岸に近く淺瀬に乗上げ乗員の退去しつゝある如きを認め、六時二十五分より七時四分迄之を砲撃し、彼の船體は一時全く黒煙に包まれ我照準を困難ならしむるに至れり、二千五百米突迄近づき檢する所に依れば、敵艦は右舷に傾斜し其上方に當れる左舷側に於てすら最下甲板後部舷窓は水中に没し、船體の水面に現はれたる部分は甚しく破壊されあるを認めたり。

對馬の應急修理は既に成り、戰闘航海に差支なく、其他兩艦共損害死傷なし。

此勳功に對し、我天皇陛下は左の勅語を上村第二艦隊司令長官に下賜へり。

#### 勅語

千歳對馬は哥爾薩港に於て敵艦を擊破し、長驅追撃の目的を達したり。  
朕之を嘉尚す。

#### 此頃に於ける旅順方面我海軍の行動

八月中旬より下旬に亘る旅順口封鎖艦隊の行動に付ては、敵艦隊の無能なる隨て共に著き戰闘の記すべきなしと雖も、每次我は多少の効果を奏して次第に敵艦隊の勢力を滅殺せり、今其公報を一括して之を左に掲ぐべし。

#### 東郷聯合艦隊司令長官報告

(八月十八日午前  
大本營着電)

去る十一日小平島附近を警戒せる摩耶赤城の二砲艦は、午前十時頃敵の砲艦ギリヤーク及オトワズヌイの二隻鮮生角附近に出で來りて我陸軍の占領地區を砲撃するを認め、直に進みて龍王塘に至り之を砲撃せしに、赤城の一彈ギリヤークに命中し、敵は直に旅順方面に退却せり。此時嶗嶺嘴附近の敵よりも頻りに我二艦を砲撃せしが一も損傷を受ざりし、又鳥海以下の砲艦隊は驅逐隊と共に、同日朝來前日の海戦より敗走し來る敵艦の旅順に入るを追躡して敵狀偵察に努め、其迅速確實なる報告は、我艦隊の行動に尠なからざ

る利益を興へたり。

同 上 (八月十九日午前  
大本營着電)

旅順方面某望樓よりの報告に依れば、十八日午後七時五十二分オトワズメイ型砲艦一隻老鐵山頂より一千米突の海面にて、機械水雷に罹り沈没せり、今盛に救助に従事しつつあるものと如し。

片岡第三艦隊司令官報告 (八月二十三日午後  
大本營着電)

午前十時敵は嶗嶺嘴砲臺附近の陣地より、頻りに我軍を砲撃するを認めたるを以て、日進春日兩艦は陸岸に接近砲撃し、少時にして之を沈黙せしめたり。又朝潮艦長海軍少佐松永光敬の報告に依れば、今朝來港外に出で我軍を砲撃しつつありし敵の戦艦セバストポリは、午後一時機械水雷に罹り、著しく右舷に傾き艦首を水中に没し、大形小蒸汽船に曳かれて旅順口内に遁逃せりと云ふ。

細谷第三艦隊司令官報告 (八月二十四日午後  
大本營着電)

旅順方面の諸望樓并に橋立の報告を綜合すれば、今二十四日午後六時二十分老鐵山の東約二海里の處に於て、敵の驅逐艦一隻機械水雷に罹り間もなく沈没し、同じく六時二十五分他一隻の驅逐艦も、亦水雷に罹り僚艦に助けられて旅順港内に入れり、前者は三本煙突にして後者は四本煙突なり、今朝來敵の港外に出でしは、掃海艇五隻驅逐艦三隻にし

て、此遭難と同時に皆港内に遁げ歸れり。

同 上 (九月一日午後  
大本營着電)

八月三十一日敵は朝來小蒸汽船四隻艦載水雷艇三隻特種掃海艇四隻端舟數隻を旅順口外に出し作業を爲せしが、午後二時二十五分城頭山下約一海里の所を掃海しつつありし敵の特種掃海艇一隻は、機械水雷に罹り爆沈せり。

同 上 (九月二日午前  
大本營着電)

去る二十五日威海衛を發し旅順口に向ひ糧食を輸送せんと企てたる露國軍用ジャンク二十六隻は、二十八日二十九日の兩日圓島及南三山島附近に於て、我封鎖艦艇の拿捕する所となり青泥窪に送致せられたるを以て、聯合艦隊司令長官の訓令に依り、取調の上其船舶及び載貨を沒收し、乗員は三隻の帆船に分乗せしめて解放せり。

### 遼陽城の占領

上來詳述し來りたる如く、各方面より滿州に進撃したる我陸軍の成果は、連戰連捷破竹の勢を以て露軍を驅逐し、一方は旅順方面に全く之を包圍し、一方は漸次遼陽方面に之を壓迫し、而して其太孤山に上陸したる我一隊は、中央軍として七月三十一日既に柝木城を占領し、八月二十九日には遼陽附近の來家堡黑牛庄を攻略し、又其右翼たる第一軍は韓國方

面より長驅して八月一日既に様子嶺楡樹林子等を占領して、八月二十七日寒坡嶺大甸子太西溝方面より遼陽附近の敵軍に接觸し、更に左翼の我第二軍は、五月五日貔子窩上陸以來或は得利寺に或は營口大石橋に、着々奇功を奏して八月三日既に海城牛莊を占領して旅順遼陽間の聯絡を遮断し、八月二十八日鞍山站砂河鎮等漸次遼陽附近を攻略し、此の如く三道竝進んで遼陽城を中心として其附近に敵軍を壓迫したる我大軍は、滿州軍總司令官大山大將指揮の下に八月二十七日以來、敵の滿州軍總司令官クロバトキン將軍の指揮する敵の大軍と戦鬪を開始し、彼我の總軍約五十萬戦線四十餘里に亘れる二十世紀劈頭第一の大野戦を以て九月四日、首尾克く敵軍を撃破し、竟に敵の根據地たる遼陽城を全く占領し、敵を奉天方面に驅逐することを得たり。

其戦鬪の状況に付ては固より此に精しく之を記述すべき筈なるも、如何せん頁數既に豫定を超過し、而して此の如き大戦鬪の状況を詳述せんことは假令數十頁を加ふるにも、能く其盡すべき所に非ざるを以て、一度先づ筆を此に擱し、他日を待つて再び黃海日本海に於ける大海戦記と共に繼續して詳記する所あらんとす、讀者幸に諒焉。

日露戦争史前終

明治三十八年二月十五日印刷

明治三十八年二月十八日發行

茨城縣行方郡玉造町三百二十四番地

發行者

新堀太四郎

茨城縣行方郡玉造町三百十八番地ノ一

發行者

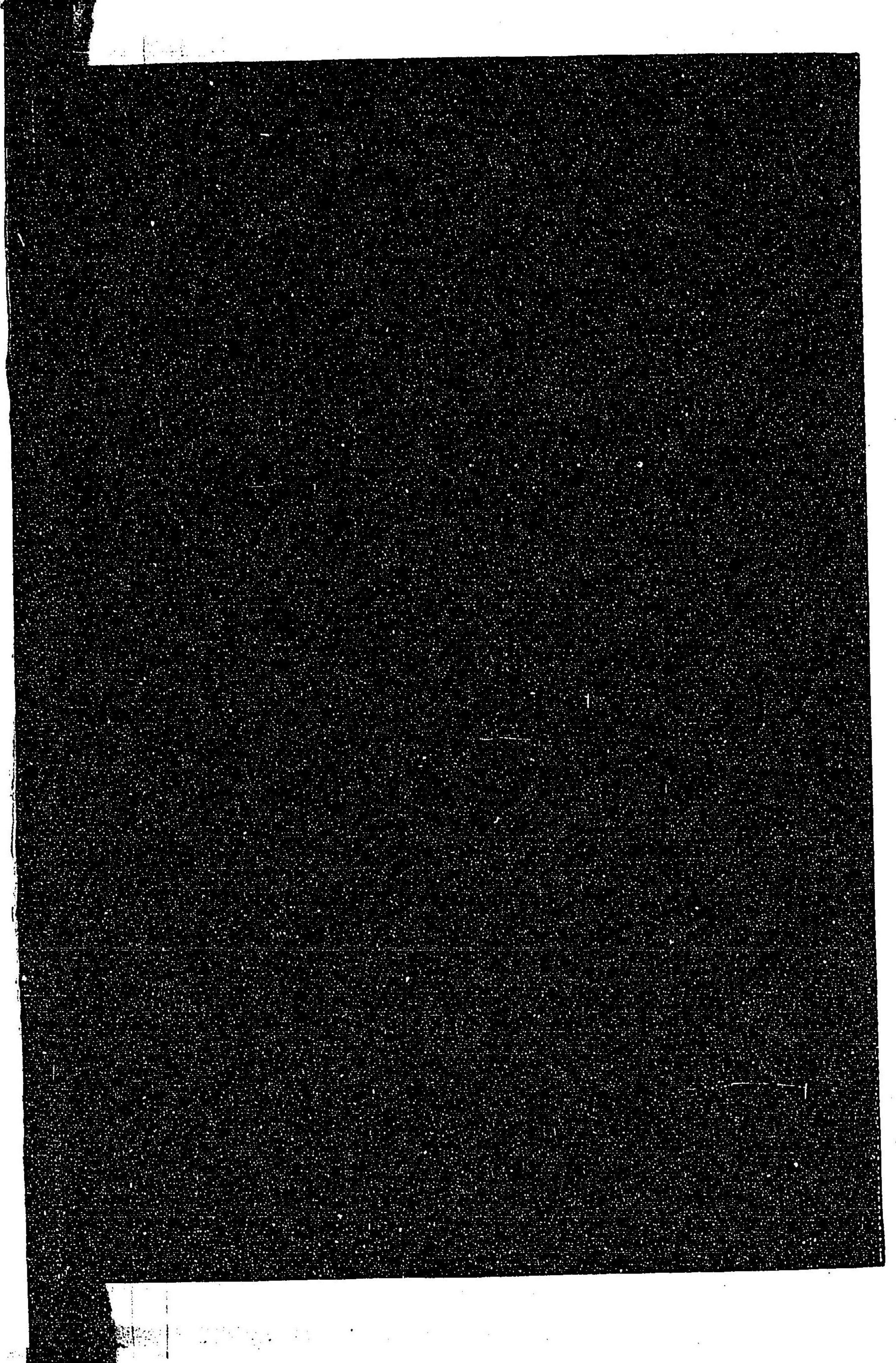
柴田勇之助

東京市下谷區長者町一丁目十四番地

印刷者

平島曠

280



318

146

Ⓜ

002882-001-7

318-146

日露戦争史

後藤 頑鉄 / 著

M38-39

ACB-6437

